

主 題：アレフ、神のことばと幸福2

聖書箇所：詩篇 119篇1-8節

「なぜ、あなたはエベレストに登るのですか?」、これはニューヨークタイムズというアメリカの新聞のある一人の記者が、その当時、世界的にも有名であったイギリスの登山家ジョージ・マロリーにした質問です。ニューヨークタイムズは彼の答えをこのように記します。「そこに山があるからです。」と。皆さんよくご存じですね。世界で最も有名な登山に関するこの引用句は、本当にジョージ・マロリーの口から出たことばかどうかは疑問の残る点が幾つかあるのですが、間違いないことは、マロリーも、そして他の多くの登山家たちも、このような態度をもって山に登りたいと心から願っていたのだろうということです。多くの登山家たちは、エベレストの美しさ、そのすばらしい姿を見てそこに心引かれました。彼らは何とかしてその頂上に立ちたいと心から願い、この山が登山家たちに与える様々なチャレンジを乗り越えたいと心から願っていました。彼らはひょっとするとこの山に取り憑いていたのかも知れません。彼らはこの山に中毒症状を起こしていたのかも知れません。

「なぜ、あなたは聖書を学ぶのですか?」と、そのように私たちが聞かれたときに、私たちの答えは確かに「そこに聖書があるからです。」ではないでしょう。けれども、私たちは多くの登山家と同じように、この神のみことばの美しさ、すばらしさに心惹かれるゆえに、このみことばを学びたくてしようがないはずです。クリスチャンであるならば、このみことばに引きつけられ、心奪われ、このみことばに取り憑かれているのかも知れません。聖書の中で、もしかすると、最もみことばに心魅せられ、心惹かれていたのは、先週から私たちが見ている詩篇119篇の著者だったかも知れません。彼は176節もの長いことばをもって、神のみことばがいかにすばらしいものであるか、いかに私たちに必要なものであるか、いかにここに神の栄光が現わされているのかを私たちに教えようとしています。

私たちは先週からこの詩篇を見始めました。特に、最初のスタンザ（広辞苑：詩の節・連、通常、韻を有し、4から8行から成る。）、1節から8節までの区分を見ているのですが、私が何よりも心から願っていることは、このみことばを見ることを通して、今朝、私たちがみな、このみことばだけが私たちに幸いをもたらすものであり、このみことばの神だけがその幸いを得る人生を私たちが歩んで行くことができるようにさせることができる方であり、この方以外に、それを私たちにさせてくださる方はいないことを私たちがみな確信することです。

詩篇の著者はこのように記します。詩篇119篇1-8節、

- :1 幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。
- :2 幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。
- :3 まことに、彼らは不正を行わず、主の道を歩む。
- :4 あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。
- :5 どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。
- :6 そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることはないでしょう。
- :7 あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。
- :8 私は、あなたのおきてを守ります。どうか私を、見捨てないでください。

☆アレフ、神のことばと幸福

A. カギとなる事柄

B. 119:1-8

1. みことばと私たちの幸福との関係 1-3節

前回、私たちは1節から3節を見ました。そこで私たちは、幸いな生涯を送る人はどのような人なのか、その紹介を受けました。1) 幸いを受ける人の特徴がどのようなものであり、そして、2) 彼らの行動がどのようなものなのかを教えている、そのことを見た訳です。著者は、幸いな人、神が「この人は幸いな人だ」という人物は、傷のない人生を送り、継続して主に従順な人だと言います。1節には「幸いなことよ。全き道を行く人々、」とあり、その人の行く道は完全なものだったのです。その人には傷がなかったのです。非の打ち所のない人です。主のみおしえによって歩み続ける人、そこには継続性がありました。そして、さとしを守る人でした。彼は従順だったからです。

その特徴を見た後、彼の行動を見ました。その行動は、最初に、彼がどのような願望をもって生きて行くのかということを書いておくことによって具体的に表わされていました。2節の後半部分に、この人は「心を尽くして主を尋ね求める人々」だと言っています。幸いな人は、単に神のみことばに魅せられているのでは

なく、神のみことばを知りたいのではなく、この人はそのみことばを語った神を慕い求める人だったのです。その神を知りたくてしょうがない人だったのです。このような願望をもっている人は、具体的な行動を取ります。その行動は「不正を行わず、主の道を歩む。」、不正を行わない者であり、神の道を歩んで行くその生き方に現われました。彼は自ら進んで、神の前に正しくないとする行動を取ろうとはしなかったのです。彼が願っていたことは、神が願っている通りに正しいことを行なって行こうとすることであり、その実際の生き方、歩みは、神が定める道を進んで行くことでした。

皆さんがよくご存じの箇所ですが、モーセがこのようにイスラエルの民に語ったことが申命記6章に記されています。6：4－6「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。：5心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」、これが「幸いな人」の心からの願望でした。私は心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、自分のすべてをもって神を愛し求めて行きたいと。そして、モーセは続けます。あなたがそのようになって行くなら「：6私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。」、私が語っているこれらのことばを、あなたの心に刻んで生きなければいけないと言います。この詩篇の著者が「幸いだ」というその人物、神が「この人は幸いだ。」というその人は、神を切に求め、神を心から愛するがゆえに、みことばを心にしっかりと刻み、神が求める生き方をしっかりと生きて行こうとする人物だったのです。私たちは前回ここまで見ました。

今日、この続きを皆さんとごいっしょに見て行きます。

2. 神の目的と著者の応答 4－5節

著者はこのように、幸いな生涯を送る人物がどのような人なのかを告げた後、この1－8節の最初のスタンザの中であって、最も驚くべき発言をしています。そこで彼は、神がなぜ私たちにみことばを与えようとしたのか、その神の目的、動機と、その動機を知った著者がどのようにそれに応答するのか、その応答を記しています。それが4節と5節に記されています。つまり、4－5節で著者は、神がなぜ私たちにみことばを与えたのか、そして、私たちがその与えられたみことばに対してどのような応答をすべきなのかを具体的に記してくれているのです。

1) 神の目的 4節

4節を見るに当たって、最初に私たちが気付かなければいけないことは、主語が変わったということです。1－3節では著者は三人称複数を使用しました。「彼ら」という表現をしています。「このような人たちが幸いです。」と主語は三人称複数です。ところが、4節では「あなたは」と主語が二人称単数になっています。なぜそれが重要なのでしょうか？この詩篇の著者は4節から神に対して語っているからです。神に向かって語りかけているのです。特に、この4節の「あなた」という表現は非常に強調されています。著者は敢えて、文法的にこの「あなた」という主語が強調される形でこのみことばを書いているのです。言い換えれば、彼はここで祈りを始めるのです。神に向かって直接語りかけているのです。日本語の聖書、新改訳聖書を見ると、4節は一行で訳されています。「あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。」と、まるで一つの文章であるかのように記されているのですが、実は、原文を理解して行くと、この節は、他のすべての節がそうであるように、二行で、二列で理解されるべきです。二つのラインから構成されているのです。そのことは、特にここに記されていることばの語順、そして、5節との対比によって分かります。実は4節と5節、特に後半部分の表現は、非常によく似ているのです。

本来、この4節はどのように訳されるべきかと言うと「あなたは、あなたの戒めを仰せつけられた。それは堅く守るためです。」、つまり、著者は4節の冒頭で「神が何をなさったのか」を宣言し、4節の後半部分で「それが何のためになされたのか」を説明しているのです。4節でc. **戒め**という、この詩篇119篇全体の中で使われている《八つの神のみことばに関する基本的なことば》の一つがあることに気がきます。この「戒め」という表現は、実際に書かれたことばや語られたことばによって表わされる、神が人に対して要求されている事柄を言い表わします。そして、このことばが「仰せつける」、または、もう少し簡単に訳すなら「命令する」という動詞とごいっしょに使われることによって、著者は神のみことばが私たちの完全な主人である方から命じられている、私たちが守らなければならない要求であることを訴えるのです。これは神の要求なのです。それゆえに、そこには神ご自身の権威があり、その権威によって語られている要求は守られなければならない要求なのです。

ところが、そのような当然のことを記しておきながら、つまり、神が語った命令であるから、私たちが従わなければいけないということが、すでに最初の「あなたは、あなたの戒めを仰せつけられた。」という部分に含まれているにもかかわらず、彼は敢えて、後半部分で「それは堅く守るためです。」ということばを付け加えるのです。非常に興味深い事柄です。確かに、この部分「それは堅く守るためです。」とはいったいどういう意味なのかよく分からないかも知れません。実際には、この部分は能動態が使われているのですが、多くの注解者や翻訳はこの部分を受動的に訳します。このようになります。

「あなたは、あなたの戒めを仰せつけられた。それはあなたの戒めが守られるためです。」と。また、別の学者はこのように訳しました。「あなたは、あなたの戒めを仰せつけられた。それは私たちがあなたの戒めを堅く守るためです。」と。言わんとしていることは同じことです。つまり、この著者が4節の後半部分で言っていることは、神が命じられたその要求を、なぜ、神がお与えになったのか、それは「私たちが与えられた命令をしっかりと守るためだ」と言うのです。

皆さん、よく考えてください。私たちはもうすでに、神のみことばに沿って私たちが生きて行くときに、私たちは幸せな人生を送ることが出来ると学びました。そのことは1-3節に明確に記されていました。そして、ここで著者は私たちにこのように告げます。「神が私たちにみことばをお与えになったのは、私たちがそれをしっかりと守るためだ。」と。

皆さん、お気づきになりましたか？神は私たちに幸せになって欲しいのです。神は私たちの幸いを願っておられるのです。私たちが心からの喜びと満身に満ちた生涯を送ることが出来るように神は願っておられるのです。それで、神はご自身の戒めを私たちにお与えになったのです。私たちが守ることが出来るために、私たちがそれを守って幸いな者として生きて行くことが出来るように。皆さんよく考えてください。神はこんなことをしなくても良かったのです。みことばなど与えなくても良かったのです。神は私たちに要求をする必要もなかったのです。罪を犯したらそれで終わりで良いではないですか？でも、神は私たちにみことばをお与えになったのです。神は私たちに語りかけて、そして、私たちに求められたことを通して、私たちがそれをしっかりと守って、神の望むような人物へと変わって行くことを心から願っておられるのです。神は私たちに幸せになって欲しいのです。

2) 人の応答 5節

そのことを理解していた著者はどのような応答をするのでしょうか？そのことが5節に記されています。いったい、どのように神がみことばをお与えになったその目的に応じて行けば良いのでしょうか？それが、5節に書かれている内容です。また主語が変わります。4節は二人称単数でしたが、今度は一人称単数になります。「あなた」が「私」になります。「あなたは戒めを仰せつけられました。だから、私は…」と彼は答えているのです。「どうか、私の道を堅くしてください。」と。

「どうか」と訳されていることばは「ああ、なにとぞ!」、「主よ、どうかお願いします!」と、そのように訳すことが出来るかもしれません。非常に珍しい文法的な形が使われています。それをもってこの著者は、彼が持っている非常に強い願望を表現しようとしているのです。「ああ、どうか、私の道を堅くしてください。私の道を確かにしてください。私の道を固めてください。」と。著者は明らかに、彼自身が「幸いだ」と言われる人物であったことを、この中で見事に言い表わしています。彼は神の道を真っ直ぐに歩んで行こうとする人だったのです。実際に、この詩篇119篇を書いたという事実が私たちにそのことを教えます。この人は主のみことばを愛して止まなかったし、主のみことばに沿って歩んで行きたいと心から願っているのです。けれども、彼は神がなぜ私たちにみことばを与えたのかという動機を理解したときに、彼の心の中には「私はもうこれで十分だ。」という妥協はなかったのです。それを見る事が出来なかったのです。彼は「私の人生はもう主の道に沿って歩んでいるように見えるでしょう。だから、私はこれで十分です。ありがとうございます。」という感謝のことばになるのではなく、彼が願ったことは「ああ、どうか私の道があなたの願っているその行くべき道と完全に沿うように、私の道を確かにしてください。」と、彼はそのように祈ったのです。

彼の人生の目的は「神の戒めを守る」生き方をすることでした。彼は言います。「あなたのおきてを守るようにしてください。私がそうなる行くことが出来るように。」と。このd. **おきて**ということばはみことばを表わすことばの一つですが、「制定、規則」と訳すことができます。このことばが表わしている主な強調点は、この神のみことばは刻み込まれた決して変わる事のない永遠に続くものであるということです。刻み込まれているゆえにもう変更ができないのです。では、その変更することが出来ないもうすでに神が語られた神の要求を、どのようにして守って行くことが出来るのでしょうか？どうすればそのような人物になって行くことが出来るのでしょうか？「私の道を堅くしてください。」、それが彼の願望だったのです。「私にはその道を堅くすることが出来ないゆえに、そのおきてをしっかりと守って行くことが出来ないゆえに、どうぞ神さま、あなたが私の道を確かなものにしてください。」と、彼は心からそのように訴えているのです。

彼がよく分かっていたことは、自分の力でこのような生き方をすることが出来ないということでした。彼が理解していたことは、神の要求が余りにも高いので、それを完全に全うすることなど出来ないという事実でした。けれども同時に、この著者は神がこのみことばを私たちが守るようにお与えになったということも知っていたのです。だから、彼は神の方に目を向けるのです。そして、心から願うのです。

「神さま、どうぞ、あなたが求めておられることを私が全うして行くことができるように助けてくださ

い!」、「主よ、どうぞ、私の足があなたの聖い道を進んで行くことができるように導いてください!」と、彼はそのように願ったのです。皆さん、皆さんもきっと痛感していることでしょう。真のクリスチャンの一番大きなジレンマ、葛藤は、私たちが神の命令に従って生きて行きたいと願いながらも、私たちはそれを完全に全うすることが出来ないということです。

私たちのうちには生まれながらにもっている弱さがあります。それゆえに、私たちは自分たちの力で神の命令を、要求を、完全に全うすることが出来ないのです。私たちのうちには罪という問題が今も残り続けています。救われた今も古い自分をもっている私たちは、その古い自分との葛藤を続けます。けれども、神はそんな私たちに対して「わたしのみことばに従いなさい。」と要求されます、そして、私たちに、その要求に従って生きるか生きないかの責任を問い質されます。私たちに責任を与えているのです。私たちは自分たちの力では出来ません。そして、私たちはそのことをよく知っています。聖霊の助けがなければ、神の恵みが私たちに与えられることがなければ、私たちは決して神の義の道を歩むことなど出来ません。一切その道を進んで行くことすら出来ません。

私たちは確かに、主に従順に生きる責任を負っていますが、神の恵みが与えられ、みことばを守る力が神から備えられる時にだけ、実は、私たちはその責任を全うすることが出来るのです。聖霊が私たちに理解力を与えなければ、私たちはみことばを知ることすら出来ません。ましてや、それに正しく応答することなど出来ません。それゆえに、詩篇のこの著者は祈るのです。確信をもって祈るのです。「主が私の祈りに答えてくださって、私がおの道を進んで行くことが出来るように、主よ助けてください。」と。助けられることを知っているのです。なぜですか？神がみことばをお与えになった目的は、私たちがそれをしっかりと守るためだったからです。

このように神が与えてくださる助け、その力がなければ、私たちはイエスが裏切られた夜のペテロと同じような姿を日々さらけ出すことでしょう。最後の晩餐のとき、ペテロはイエスに向かって大きな確信をもって、非常に強い決意をもって、このようなことを言いました。マタイ26:35「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。…」と。ペテロは何の考えもなしに、ただ何となくイエスの機嫌を取るためにこんなことを言ったのではありません。彼は強い確信を持って「どんなことがあっても、たとえ、だれがあなたを否定したとしても、私だけは絶対にあなたを知らないなどと言うことはありません。たとい、私がおのといっしょに死ななければならぬとしても、私は絶対にあなたを知らないなどと言うことはありません。」と、彼は決意していたのです。彼は誓っていたのです。彼は間違いなく、自分の主を否定することなどないという確信に満ちていたのです。けれども、何が起こったのか、皆さんご存じですね。彼は朝が来るまでに三度、イエスを否みました。26:72「それで、ペテロは、またもそれを打ち消し、誓って、「そんな人は知らない。」と言った。」

皆さん知っておられますか？三回の内二回、ペテロに質問をした人は日本語の聖書では「女中」と訳していますが、このことばを原文で見ると、この人は実は十代の少女です。皆さん想像出来ますか？あのような大胆な告白をし、非常に力強い決意をもって「絶対に私はあなたを裏切ることはありません。あなたを知らないなどと言うことはない。」と言ったペテロが、十代の少女に「あなた、イエスといっしょにいませんでしたか？」と問われたときに、彼は「そんな人は知らない。」と言うのです。私たちは決してペテロをバカにすることは出来ません。ペテロに対して高ぶって「ああ、あなたは何と愚かな人でしょう!」とそのようなことばを口にすることさえできません。なぜなら、私たちもみな同じことをして来たからです。皆さん、このようなことはありませんか？神の前に、祈りの中で、また、いろいろなときに「神さま、私はもう二度とこんなことはしません!あんなことはしません!」と誓ったことや、また、「神さま、次にこのような機会があったら、絶対にあなたの言われる通りに、そのように生きます。」と言ったことなど…。でも、私たちもペテロと同じようにそのように言った直後に苦々しい涙を流しませんでしたか？

神の前を完全に歩んだ人物はただ一人しかいません。イエス・キリストだけです。そして、私たちはこの方の助けが必要なのです。このことを良く理解していたこの著者は「どうか、私の道を堅くしてください。」、「あなたが確かにしてください」と言いました。皆さん、これは皆さんの心からの叫びでしょうか？皆さんは、皆さんの生涯の日々の歩みをこのような思いをもって進めて行こうとしていますか？皆さんは神の戒めを心から守ろうと願って生きていますか？それこそが皆さんの人生にとって最大の目的でしょうか？この詩篇の著者の目的はまさにそれでした。そして、彼は私たちに同じ目的をもって生きるように、私たちにチャレンジするのです。

この4節と5節で、絶対に失敗することのない成功の秘訣を見ることが出来ます。神はご自身のみことばを私たちにお与えになりました。それは私たちがそれを堅く守るためでした。熱心に守って行きた

めでした。けれども、神はそれを私たちが自分たちの力で守ることが出来ないことを知っておられるゆえに、私たちにその道を歩むことが出来るように助けを備えてくださるというのです。私たちが自分たちがいかに足りない者であり、力のない者であるのかを良く理解し、主の前にへりくだって「神さま、どうぞ私があなたのその要求を全うすることが出来るように助けてください。」と祈り願うときに、神はその力を備えてくださるのです。パウロはこのように言いました。ピリピ2：13「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」と。このように、私たちが自らの弱さに気づき、自らの力のなさを認め、神の前にその助けを願い求めて出て行くとき、その結果、神は私たちに力を与え、私たちは神の道に歩むようになります。そうして、神がみことばをお与えになったまさにその目的を達成しながら生きて行くようになります。そして、私たちは幸せになります。みことばに沿って歩いて行くからです。

このように、もし、神が私たちの祈りを聞いてくださるなら、そこには必ず具体的な結果が現われます。間違いなく起こって来る結果があります。そのことについて、著者は6-7節に記します。

3. 結果 6-7節

5節で祈った祈りが聞かれることに疑いをもたなかった彼は、「そうすれば」とその結果を記して行きます。具体的に、彼は二つの結果を教えます。

1) 恥じることの無い生涯 6節

5節で「私の道を堅くしてください」と祈った彼の祈りが聞かれるなら、6節「そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることはありません。」と彼は言うのです。この「恥」という概念は、古代中近東の文化を知る上で絶対に理解しておかなければいけない大切な概念の一つです。当時の社会においてこの「恥」とは非常に重要なものでした。これは単に「ああ、恥ずかしい」というものではなくて、もし、人が恥を受けるなら、それは人生最大の災害であり、屈辱であり、生きて行くことすら出来ないと思うような事柄だったのです。私たち日本人にはそのことは何となく分かります。私たちも「恥の文化」の中に生きているからです。古い時代の日本人たちは、自分の名前に恥を受けるよりも自ら潔く死ぬ方が良く考えました。この当時の社会にあって、「恥」とはそのようなものだったのです。それゆえに、彼らはありとあらゆることをして恥を受けないように努力しようとしていました。

しかし、この詩篇の著者が言うことは「神の備えてくださった道をしっかり歩いて行くなれば、その結果、彼は恥を受けることは一切ない。恥じることはありません。」です。確かに、この「恥」という概念は、通常、他の人たちから自分がどのように見られるのかという部分に使います。ところが、この6節で著者が使っている表現を見ると、彼が周りの人たちを気遣っていることを見る事が出来ません。むしろ、ここで彼が気にしていることは、他の人が自分をどのように見てどのように受け入れてくれるかではなくて、自分の内側に恥があるかないかということです。

では、どのような時に「恥のない生き方」をするのでしょうか？恥がないと思うのでしょうか？そのことが6節の前半部分に記されています。「私はあなたのすべての仰せを見ても、」とあります。e. **仰せ**は「命令」と訳すことが出来ることばですが、先ほどはこのことばの動詞形が使われていました。神のみことばを表わす重要なみことばの一つですが、この命令は神がもっておられる権威がそのことばの中にあることを表わしています。それゆえに、従わなければいけない様々な事柄です。そして、彼は言います。神が語っておられる命令の一つ一つを見た時に「私は恥じることはありません。」と。周りの人ではないのです。自分自身と神のみことばを見比べたとき、神の命令を理解しそれを自分の前に置いたときに、私は内側で恥じることはありませんと言うのです。しかも、ここで使われている「見る」ということばは、単に眺めるとか見るというのではなくて、注意深く継続的にそのことに焦点を当てて思い巡らすという意味合いがあるのです。

皆さん、著者が言っているのは内側のことです。彼が気にしていたのは周りの人たちが自分のことをどう見るのかではなく、彼が心から気にかけていたことは、すべてをご存じである神の前で私が恥を受けるか受けないかということです。神が私を見てどう思われるのかということです。主なる神から恥とされること以上に酷いことはありません。主なる神から、神が定められた基準に沿ってないゆえに、「あなたは何と恥を受けるべき存在なのだ！」と言われることほど最悪なことはありません。けれども、著者はよく知っていたのです。5節で祈ったその祈りを神が確かに聞いてくださることをよく知っていたゆえに、神が私の道を堅く保ってくださいなら「私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることはありません。」と言います。一部の仰せではありません。特定の命令ではないのです。みことばのすべてを見たときに、それを私の目の前に鏡として置いたときに、私は自分の姿を見て恥じることはありませんと言うのです。神の基準に沿って私が測られたときに、確かに「私は主の道を歩んでいる」と宣言することが出来るゆえに「恥がない」と言えるというのです。神の助けがあるときに、神が自分を力づけて守ることが出来

るようにしてくださるときに、彼は屈辱的な痛みを経験することがないのです。

彼は恥じることがありません。なぜなら、彼は主の道を歩んでいるからです。彼が恥じることがないのは神の働きが彼の人生に働いていることを知っているからです。確かに、彼は完全からはるかに遠ざかっていました。彼は自分自身の人生、生涯が完全ではないことを分かっているながらも、確かに、主が命じられている道を生きているということ、主に似た者に変えられて生きていることを確信しながら生きていたのです。皆さんもよくご存じだと思います。Ⅰヨハネ5：13にはこの手紙がなぜ書かれたのかというその目的が記されています。「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」、あなたがたは確かに救われている、永遠のいのちを持っているということを確認させるためだと言います。ヨハネはこの手紙で私たちが永遠のいのちを持っている確信を持たせようとしてこのように言います。

「神が光の中におられるように私たちも光のうちを歩まなければならない。」、「私たちが神を知っているとすなわち、私たちはその命令を守らなければならない。」、「私たちはキリストが歩まれたように歩まなければならない。」、「私たちはこの世の中にあるものを愛するのではなく、神のみこころを行なって生きなければならない。」、「私たちはキリストが清いように、自らも清くしながら歩んで行かなければいけない。」、「神が私たちが愛していることを知っているなら、私たちは互いに愛し合って生きて行かなければいけない。」と、リストを上げればきりがありません。

皆さん、これらの要求を聞いて「このような生き方をしていたらあなたはクリスチャンです。永遠のいのちを持っています。」と言われて、皆さんは何も考えずに「確かに私はクリスチャンです！」と言えますか？確信をもって「このような生き方をしています。」と言えますか？皆さん、不思議に思いませんか？私たちは言います。「はい、確かに救われています。」と。完璧だからですか？違いますね。完璧でないことはよく分かっています。私たちはときに、神が光の中におられるのに光のうちを歩まないことを知っています。私たちは神の愛を知っているとすなわち、互いに愛し合っていないことがあることを知っています。でも私たちは、そのような足りない私たちのうちに働いて、私たちがそのような生き方をして行くことができるように助けをくださっている神の働きを理解します。それを味わいながら毎日生きています。私たちが心から願っても到達することが出来ない神の願っておられることを全うして生きて行く生涯を、私たちにさせてくださるその力を感じながら私たちは日々生きています。確かに、私たちは失敗します。けれども、私たちは自分たちの生涯の中に神が確かに働いて、私たちが主の道をしっかり歩んで行くことができるように助け導いてくださる神の姿を経験します。そのことを知っています。神の手が私たちがキリストに似た者へと形作り続けてくださっていることを理解するのです。

確かに、「ヨハネの手紙第一」を読むと私たちは恐ろしくなります。けれども、本当に救われている人がこの手紙を見たときに落ち込むでしょうか？「ああ、私はもうダメだ。」などと思うでしょうか？そうではないはずです。私たちの信仰、私たちの救いの確信は、聖霊なる神が私たちのうちに働くときにのみ与えられるものです。湧き上がって来ます。私たちの救いの告白、信仰の告白によって、私たちは救いの確信を持つものではありません。私たちが一生懸命努力して神が言われていることを守ろうとするその努力が私たちに救いの確信を与えるのでもないのです。救いの確信を与えるのは聖霊だけです。私たちが自分は神の前に足りない者であることをよく理解し、神の要求を満たすことが出来ないことを知って、その要求に沿って行きたいという願いを強く持つゆえに「主よ、どうぞ私を助けてください。」と願う時に、神が確かに私たちのうちに働いて、私たちを変えてくださることを私たちが知っているから、それを体験しているから、私たちは確かに「私は永遠のいのちを持っています。」と言えるのです。

この神の恵みが私たちのうちに溢れるときに、私たちは主の道を歩むことができます。それゆえに、神のみことばを見たとしても私たちは恥じることがないのです。確かに、責められます。出来ていないことに気付かされます。でも、そのことに気付いた私たちは「主よ、出来ていないゆえに私はしたいのです。」と心から願い、「神さま、あなたの働きがあることに感謝します。」と言って、主の前に正しい歩みを為し続けて行くことが出来るのです。「恥じることがない」のです。

2) 礼拝の生涯 7節

でも、それだけではありません。具体的な結果としてもたらされるものは「礼拝の生涯」でもありません。「恥じることのない生涯」だけでなく「礼拝の生涯」が生まれるのです。7節にそのことが書かれています。「あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。」と。私たちがみことばを学ぶとき、そのみことばは私たちの心に神への称賛、神への賛美、神への感謝を沸き立たせます。もし、それが起こらないならば、私たちはクリスチャンとしてどこかおかしいです。救われている者としてどこかおかしいのです。「感謝します」と訳されているこの動詞は「賛美する、称える、礼拝する」と

訳すことが出来ることばですが、「礼拝」が純粋な心から正しい心から為されていることが「私は直ぐな心で」という表現で表わされています。

この礼拝、この称賛、神への賛美は、曲がったところのない正直な心からの思いで為されています。どのようなときにそれが為されるのでしょうか？「あなたの義のさばきを学ぶとき」です。f. **さばき**、これもみことばを表わす重要なことばの一つですが、このことばは神がみことばをもってさばくその行為、そして、さばいた結果を表わします。ときに、詩篇の著者はこのさばきを神に求めます。「どうぞ、私の敵をさばいてください」と…。また、そのさばきの結果、その宣告がみことばに記されています。それを見たときに彼は賛美が止まないと言うのです。

この7節で一番重要なことばは「学ぶ」でしょう。この著者は明らかにみことばをよく知っていました。みことばに関する非常に深い知識を持っていました。事実、98節から100節までを見た時に、彼が持っているみことばに関する知識は他の人たちに比べて余りにも深いことを、彼は実際に自分の口で表現しています。「:98 あなたの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。それはとこしえに、私のものだからです。:99 私は私のすべての師よりも悟りがあります。それはあなたのさとしが私の思いだからです。:100 私は老人よりもわきまえがあります。それは、私があなたの戒めを守っているからです。」、けれども、彼はこの詩篇の中で何度も繰り返して「神さま、どうぞあなたが私を教えてください。」とお願い続けるのです。「あなたのみことばを教えてください。」と。皆さん、彼は自分が到達するべきところに到達していないことをよく分かっているのです。だから、彼は継続して学び続けるのです。そして、そのように学び続けて行くときに、彼の内には神に対する賛美と感謝が溢れ出るのです。それが分かれたところのない、一つの正直な心からの賛美となって、彼の唇からほとばしり出るのである。

神のみことばは神への礼拝を促します。このみことばは神がどのようなお方で、神が何をなさったのかを教えてください。このみことばは、私たちの目の前に神のすばらしさ、神の栄光がどれ程のものかを見せてくれるのではないですか。私たちはこのみことばを通して、神の愛と真実がどのようなものなのかを知ります。このみことばを通して、私たちはどれほどすばらしい恵みとあわれみのゆえに、私たちに救いが備えられたのかを見ることが出来ます。どうして、みことばを学んだら礼拝が起こらないのですか？それがこの詩篇の著者が私たちに言っていることです。真の礼拝は「空虚」の中では起こりません。空っぽのところでは起こらないのです。真の礼拝は、神のみことばが豊かに解き明かされるその所にもたらされます。真の礼拝は、私たちの頭がみことばを理解しようとみことばと葛藤しているところで起こるのです。ある人たちは、礼拝というのは何か温かい雰囲気のあるところで何となく気持ちが良くなるような状況の中で行なわれるものだと考えます。けれども、真の礼拝は「霊とまことによって」為されるものです。みことばの深い学びが起こるところで、人の心は神に対する愛で燃え上がるのです。最初に頭、次に心が来ます。もし、私たちが頭を飛び越えて礼拝をささげようとするなら、心は空っぽなのです。みことばを中心とした信徒は常に礼拝をささげる信徒です。みことばを中心としている教会は常に礼拝をする教会です。

この神に対する称賛と感謝は、私たちがみことばを学べば学ぶほど大きなものへと変わって行きます。マッカーサー先生はこのように言いました。「私たちがみことばを深く学んで行くなら、私たちは高い礼拝を、すばらしい礼拝をささげることが出来るだろう。」と。ローソン先生はこう言いました。「みことばを深く探求して行けば、私たちの心は天にある神の御座へと駆け上って行く。」と。このような結果が起こります。神が私たちの祈りに答えてくださるときに、私たちがみことばを守って生きて行こうとするときに、幸いな生涯を生きて行こうとするときに、このような結果が起こって来るのです。そこには神の前に立って恥じることのない生涯があり、そこには神に対する礼拝に満ち溢れた生涯が出て来るのです。

4. 決意 8節

そして最後に、著者は彼が持っている非常に大きな「願いと謙遜」を言い表わしてこの最初のスタンザを終えます。

1) 願い

彼の決意、願望は8節「私は、あなたのおきてを守ります。」です。皆さん、これは5節の祈りと深い関係があります。彼はこのように祈りました。「どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。」と。そして8節で、だから「私は、あなたのおきてを守ります。」と、彼は祈ってその後怠惰ではないのです。祈ったその祈りを実際似生きて行くことが出来るように、彼は強い決意と願いをもって、神の前に言い切るのです。「私はそのように生きて行きます。あなたのおきてを守ります。」と。彼は神が働いてくださることを、寝ながら怠けながら待っているではありません。自ら、出来ることを一つ一つやって行く決意が出来ているのです。確かに、私たちは何もできないゆえに、弱々しい

存在であるゆえに、神の命令を守ることが出来ないかもしれないけれども、だからと言って、そこに私たちが守らなければならない責任がなくなる訳ではないのです。守って行かなければいけないのです。だから、彼は告げるのです。「守ります!」と。

多くの信徒は確かに5節に書かれている祈りを祈るでしょう。ときに深い涙を流しながら「神さま、どうか私があなただのみことばに沿って生きることが出来るようにしてください」と祈るでしょう。でも残念ながら、その祈りをする多くの信徒たちは8節のこのことばを言うことをしないで人生を過ごそうとします。彼らはまるで、神がランプの精のように思うのです。祈りをすることによってランプを擦り、神が「あなたの願いを叶えましょう」と出て来てくれることを待っているのです。そして、いつまでもその働きが起こらないゆえに落胆し、何も変わることがないと言って、嘆きの内に幸いでない生涯を歩み続けるのです。

皆さんに必要なことは、祈り、実行することです。神は私たちがやっ行ってこうとしないことを、私たちに成してくださいませ。私たちは祈ることを生きなければいけないのです。なぜ、神の祝福、約束を受けることが出来ないのかとあなたは悩んでおられるかも知れません。その答えは単純なところにあります。皆さんがこの決意をもって、実際に自らの生涯を生きていないからかも知れません。この著者は違ったのです。彼は決意を持っていたのです。彼がこのような生き方をして行きたいと願うゆえに、「私はそうします!」と言ったのです。

2) 謙遜

そして、このスタンザの最後のことばが出てきます。「どうか私を、見捨てないでください。」と。不思議に思いませんか?なぜ、このような形で終わるのでしょうか?なぜ、「見捨てないでください。」なのでしょう?彼がこんなことばを記したのは、彼が自分のことをよく理解していたからでしょう。「見捨てないでください。」と訳されていることばは、実は、詩篇22篇1節に使われていることばです。ダビデがこのことばを言ったのですが、ダビデよりも偉大なダビデと言われる主イエス・キリストはこれと同じことばを、約1000年後に十字架の上で言われました。非常に個人的な切実な願いであることが見えませんか?そういうことばなのです。日本語の聖書には訳されていませんが、ここには「圧倒的な、これ以上ないほどに」ということばが加えられているのです。圧倒的な形で、もうどうしようもないほどに見捨てることがないようにしてくださいと、実は、彼はそのように祈っていたのです。

なぜ、彼はこんなことを言うのでしょうか?その理由はこうです。この詩篇の著者は確かに、強い決意をもって神の前に「あなたのおきてを守ります」という思いを抱いていました。けれども同時に、彼は自分の力でそれをすることが出来ないこと、神との途絶えることのない継続的な交わりがなければこのような生き方は到底して行くことが出来ないことをよく分かっていたゆえに、彼は願い求めるのです。「どうか私を、見捨てないでください。」と。

ここには、自分自身に対する自信など一つも見ることが出来ません。自分の力で律法を守って行くことが出来る、みことばを守ることが出来るなどという思いをそこに見ることは出来ません。特に彼は、この詩篇の中で彼が抱えていた様々な困難を記しています。そこには様々な問題があったのです。そのような困難な中で、私があなただのみことばを守って生きて行くためには、私はあなたとの継続的な途絶えることのない交わりが絶対に必要だと、彼はそう言うのです。それがなければ私は生きて行くことができない、私はあなたの前に正しい生き方をすることができないと。だから彼は、だれよりも彼のことを気遣い、だれよりも彼のことを愛し、だれよりも彼を幸せにしたいと願っておられる神に言うのです。「どうか私を、見捨てないでください。」と。

本当の幸福は自分自身の限界を知っている者にしか与えられません。本当の幸せは、自分ができない者であるということを理解している者しか味わうことが出来ません。神の前にへりくだる者だけが神の恵みによって高くされるのです。神の前に謙遜な者だけが神の恵みを受けることが出来るのです。イエスはこのように言われました。マタイ5:3「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」神の前にあって私はいかに足りない者で、もう破産したような状態であることを理解したものが幸いだといエスは言われました。また、マルコ2:17「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」だれが神のあわれみを受けたのでしょうか?「私は病人です」と気付いている人たち、「罪人です」と分かっている人たちでした。私は何も出来ない知っている人だけが神のあわれみを受けたのです。イエスは言われました。ヨハネ9:39、41「:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。…:41 イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える。』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」

皆さん、神に前にへりくだっておられますか？皆さん、自分は本当に出来ない存在だと分かっておられますか？自分の力に過信していませんか？私たちは神の助けがなければ何も出来ないのです。だから、神の助けがあるのです。神のみことばは「オートロック」のようなものです。でも、神のみことばがすごいのではなくて、みことばの神が驚くべき方なのです。神の道は完全な道であり、そこには幸せがあります。神の要求は高く、私たちに命じられていることは困難なことばかりです。けれども、恵み深い神は、私たちがそのみことばを守って生きて行くことが出来るように、私たちが幸せに歩んで行くことが出来るように、私たちを助けてくださる方でもあるのです。神の助けは常に私たちのうちにあります。

救われている皆さん、クリスチャンである皆さん、皆さんのうちには聖霊が宿っているのです。その聖霊は皆さんを助けたくてしようがないのです。聖霊は皆さんを満たして、皆さんがみことばに沿って歩んで行けるようにしたくてしようがないのです。皆さん、その聖霊にすべて委ねておられますか？「どうぞ、私の歩みをあなたの道に沿わせてください。」と願いながら、「私はあなたの命令に沿って歩みます。」と誓いながら、皆さんは神の助けを切に求めて歩んでおられますか？そのようにするとき、神は確かに私たちを助けてくださるのです。

歴史上、最も知恵のある人物と言うことが出来るソロモンはこのことをまとめています。皆さんよくご存じの箇所です。箴言3：5-7「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。：6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。：7 自分を知恵のある者と思ふな。主を恐れて、悪から離れよ。」、まさに、私たちが今日学んだことではありませんか？このことばは皆さんの生涯を言い表わしていますか？皆さんの人生は神のみことばによって導かれていますか？皆さんの人生、皆さんの生涯は神のみことばを知って、その知ったみことばを生きて行きたいという心からの願いに満たされたものですか？それに現わされていますか？皆さんは自分がいかにできない存在なのかを知っていますか？そして、その全く神の目に何も喜ばれることが出来ないどうしようもない自分を、神のみこころに従うことができるように変える力のある神に信頼して生きていますか？

皆さんは、主のみことばを切に求めそれに沿って生きようとしていますか？もし、答えがすべて「イエス」であるなら、神は皆さんのことを「何と幸いな人か。」と言ってくださっています。私たちはみな、そのような人生を歩みたいと思いませんか？主が「幸福だ」と呼ばれる人生を…。